

生意気で優秀な後輩に弱みを握られた上司の私がネチネチ意地悪
えつちで身体も心もわからされる話

「正直驚きましたよ。あの完璧な先輩がこんな恥ずかしいミスを隠していたなんて…。」

週末の夜のオフィス、周囲の社員が退社し、最後に残った後輩の侑が理花に声をかけてきたのは、21時を回った頃だった。

侑は入社二年目の新人で、理花の部下だ。人当たりが良く、皆から好かれているが、何故か理花にだけは少し生意気な態度を取る。それでも、そんな態度も気にならないほど優秀で、理花自身、侑の手腕に何度も助けられていたのは事実だった。

理花は侑に突きつけられたスマートフォン画面を見つめたまま、

固まっていた。

そこには理花が取引先に送ったメールのスクリーンショットが映されていた。発注数の桁を間違えて、数を修正するために慌てて取引先に送ったメール。メールの末尾には内密にお願いします、という文字。

完璧主義の理花が初歩的な、それでいて致命的なミスを犯したという動かぬ証拠だった。

「どうやってそのメールの写真を…？」

「…僕がこのメールの写真を手に入れた経緯なんてどうでもいいことですよ。それよりも問題は、僕がその気になればこの写真をいつ

でも送れる、ということですよ。例えば部長に送ったら？…先輩の完璧なキャリアウーマンの顔なんて一瞬で崩れ去りますよ。」

理花は青ざめて首を振る。

理花は順調に昇進し、異例の若さで課長の地位まで昇りつめていた。そうやって積み重ねてきた信頼が、今、目の前の青年によって脅かされている。

「すぐに削除して…！」

理花は震える手でスマートフォンを握る侑の腕を掴もうとした。しかし侑はそれを巧みにかわし、逆に理花を壁際へと追い詰めた。

至近距離で見つめてくる侑の顔は悔しいくらいに整っている。表情は穏やかだが、その瞳には、いつもの人懐っこい後輩の面影はなく、獲物を見つめる捕食者のような鋭い光が宿っていた。

「先輩の考えてること、分かりますよ。絶対にバラされたくないですよね？」

侑は理花の耳元に顔を寄せ、熱を帯びた吐息とともに、逃げ場のない宣告を告げた。

「今夜、付き合ってくださいよ。仕事じゃなくて、プライベートで……拒否権、ないのは分かっていますよね？」

理花は反論しようと口を開きかけたが、目の前のスマートフォン
の光が、理花の犯した罪を冷酷に照らし出していた。プライドも、
立場も、すべてがこの年下の青年の指先に握られている。

「……どこへ、行くつもり？」

理花が絞り出した消え入りそうな声を聞き、侑は満足げに目を細
めた。

「決まってるじゃないですか。僕がずっと、あなたと行きたかった
場所ですよ。」

こんな状況で大人の男性が理花を連れて行きたい場所。それがど

んな場所か分からないほど、理花は子どもではなかった。理花はあまりの屈辱に唇を噛む。

侑は数歩後ろに下がり、理花から離れると、デスクの方へ視線を投げた。

「すぐにここを出る支度をしてください。僕の手で行きましょう。」

理花は仕方なく頷く。あの写真が出回ることだけは何としても避けなければならぬ。

震える手で荷物をまとめ、パソコンを閉じた。

見慣れた会社のオフィス。この空間では自分の方が立場が上のは

ずだった。今、それが完全に逆転している。



侑に連れて行かれたのは会社の近くの繁華街にある少し高級なラ
ブホテルの一室だった。重い部屋の扉が閉まった瞬間、カチャリと
いう無機質な音が理花の退路を完全に断った。

ピンクがかった間接照明が、部屋の中央に鎮座する大きなキング
サイズのベッドを不気味に浮かび上がらせている。

理花は壁際に立ち尽くし、バッグのストラップを壊れそうなほど

強く握りしめた。

「……ねえ、侑くん。話を聞いて。お金なら、いくらでも払うわ。部長にあなたのキャリアについて口添えしてもいい。だから、こんなことはやめて。」

「お金？ 僕がそんなもの欲しがってるように見えますか？」

侑は車の鍵をサイドテーブルに放り投げ、理花に歩み寄った。その瞳には、オフィスで見せていた従順さは微塵もない。

「……そこに、寝てください。」

侑が顎でベッドを指した。理花は顔を強張らせ、激しく首を振る。
「嫌よ。そんなこと、できるわけないでしょう。私はあなたの上司なのよ?」

「…上司、ね。今のあなたに、そんなことを言う資格があるんですか?」

侑は冷たく低い声でそう言つて、証拠が保存されているスマートフォンを手取る。

「いいんですか? 今ここで、僕が例のスクリーンショットを送信しても…。」

侑はスマートフォンを操作し、画面を理花の目の前で点灯させた。暗闇の中で、あの誤発注を隠蔽しようとする理花の醜い足掻きが、鮮明に映し出されている。

「僕の気分次第であなたのキャリアは終わりですよ。明日から、どんな顔をして出社するつもりですか？ 全員があなたを指差して笑いますよ。『完璧な仙道課長が、あんな初歩的なミスを揉み消そうとした』って。」

「やめて……。 」

理花の唇が震える。その想像は、死よりも恐ろしい。

侑は怯える理花の耳元で冷たく、そして甘く囁いた。

「嫌なら、僕の言うことを聞いて。……さあ、寝てください。」

理花は屈辱に顔を歪め、怒りを込めて侑を睨んだ。それから、投げ捨てるようにして荷物をソファの上に置き、しぶしぶと、仰向けにベッドに体を横たえた。

ふかふかとしたマットレスの感触が、今の理花には底なしの沼のように感じられた。

「……これで、満足？」

震える声で問いかける理花を見て、侑は楽しげに口角を上げた。

「満足なわけないでしょう。……これからですよ、先輩。」

侑は靴を脱いでベッドに上がると、理花の上に跨って膝立ちになったまま、理花を見下ろした。

「先輩、あんまり睨まないでください。時間をかけて可愛がつてあげるつもりなのに、そんな顔をされたらすぐにぶち込みたくなってしまう。」

侑は丁寧な手つきで、理花のジャケットのボタンに手をかけた。それから、理花の体を少し抱き起こし、滑らせるようにジャケットを脱がせる。普段、オフィスで優秀な上司として振る舞っている理

花を守っていた鎧がベッドの下へ落ちる。

「…いい身体してますね。」

侑はブラウス一枚になり、薄く下着が透けて見えている理花の姿を見て独り言のように言った。侑の手は白いブラウスの第一ボタンへと伸びる。

「やめて、侑くん…。」

理花は微かな声で抵抗した。だが、侑は冷ややかな目でバラしてもいいのか、という無言の圧力をかけてくる。

侑は理花が黙ったのを確認して薄く笑うと、容赦なくブラウスのボタンを上から順に外していった。一つボタンが外れるたびに、理花の心臓の鼓動が早くなる。

最後のボタンが外され、侑がブラウスの襟をゆつくりと左右に開いたとき、理花は思わず目を閉じた。

「……へえ。」

侑の口から、感嘆とも感心ともつかない、低い声が漏れた。

薄暗い間接照明の中で、理花のブラウスの下から現れたのは、淡い紫色の、レースがふんだんにあしらわれた可愛らしいデザインの下着だった。オフィスの、常に冷静沈着で隙のないキャリアウーマ

ンである理花からは、想像もつかないほど女性らしい下着だった。

侑は、理花の白い肌と、ブラジャーをじつと見つめ、人差し指でゆつくりとレースの縁をなぞった。理花の身体が、その冷たい指先にビクッと跳ねる。

「先輩……。」

侑が理花の耳元に顔を寄せ、悪戯が成功した子供のような、それでいてひどく色っぽい声で囁いた。

「職場ではあんなに強気なのに、中にはこんなに可愛いを着てたんですね。……ギャップがありすぎて、ますます興奮しますよ。」

その言葉に、理花の顔は屈辱で真っ赤に染まった。取引先へのメー
ールを見られた時よりも、今のほうがずっと、自分の中の大切な何
かを暴かれた気がした。

「見ないで……。」

理花はあまりにも恥ずかしくて、両腕を胸の前で組み、下着を隠
した。

「先輩、ダメですよ、隠しちゃ。ほら、胸から手を離して両腕を上
げてください。」

理花がしぶしぶと言われたとおりに両腕をあげると、侑は自分のジャケットを脱いでベッドの淵に置いた。それから、自分の臍脂色のネクタイの結び目に指をかける。

「な、何するつもり……?」

理花の問いに、侑は答えない。ただ、シュルシュルと衣擦れの音を立ててネクタイをほどく。その端を指に絡め、試すようにピンと張った。

「…こうするんですよ、先輩。」

侑は理花の両手首を一つにまとめ、手慣れた手つきでネクタイを

巻きつけた。ネクタイの滑らかなシルクの生地が、理花の柔らかな肌に食い込んでいく。

「嘘……！？ちよつと、解いて……！」

「ダメです。抵抗されたら面倒ですから。」

侑はきつめに結び目を締めると、余ったネクタイの端をぐいと引いた。自由を奪われ、頭上に固定された腕。その姿勢は、理花の無防備な胸元をさらに強調し、理花の上司としての威厳を完全に剥ぎ取っていた。

「これで、もう逃げられませんね。……本当、よく似合ってますよ。」

僕の色に染まったみたいで。」

侑は縛り上げた理花の手首に、ちゅ、と音を立ててキスを落としました。

理花はひっ、と小さく声を上げる。まるで恋人のような口づけをされるのが、ひどく恐ろしかった。

侑は、視線をその下の淡い紫色のレースへと戻した。

「さてと、邪魔なものはどけましょうか。」

侑の指先が、背中の中ホックへと迷いなく伸びた。音もなくホックが外され、支えを失ったレースの布地が滑り落ち、理花の白い胸が

露わになる。

「想像していたより大きい。先輩…すごく綺麗ですよ。」

「いやっ、見ないで…」

後輩にブラジャーを剥ぎ取られて、胸を直接見られているという事実に理花は心が裂けそうになる。理花は頭上の手首を振ったが、シルクのネクタイは理花を逃がさない。

「先輩、どうせ逃げられないんですから、大人しくしててください。」

「…あっ……………」

侑の大きな手のひらが、理花の胸を直接包み込んだ。吸い付くような肌の感触を確かめるように、侑はゆつくりと指を動かし、その質量を味わう。

「先輩のここ、ずっと触ってみたかったですよね。……思ってたとおり、すごく柔らかい。」

「やめて、お願い……………もう、十分でしょう……………」

理花の声が嫌悪と羞恥で震える。

一刻でも早く、この最悪な時間が終わって欲しいと願っていた。

「嫌ですよ。やつと先輩の胸に触れたんですから。先輩だって嫌なだけじゃないでしょう？」

「……っ！」

侑に指摘されたとおり、嫌で仕方がないのに、身体は正直に反応していた。侑が優しく、それでいて執拗に胸の頂の周りを撫でるたび心臓の鼓動が速くなっていく。

「……あれ？」

侑は動きを止め、わざとらしく理花の顔を覗き込んだ。

「先輩、ここ……。すごく硬くなってるじゃないですか。」

「そんなこと……。っ……。」

理花は首を振るが、侑の目にははつきりと、理花の膨らんだ乳首が見えていた。

「先輩、嘘つきですね。それならもつと硬くしてあげますよ。」

侑はそう言って、両手で理花の胸の頂をつまむと、コリコリと刺激始めた。

「きやうつ！」

理花はたまらず声を上げる。口を塞ぎたいのに、腕は縛られていて解けそうにもない。

「ふふつ、そんな可愛い声出すんですね。もつと聞かせてください。」

侑は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、さらに強くそこを摘み上げた。

コリコリッ、コリコリッ

「…んんっ、んっ、んんん！」

（感じてるって気づかれたら恥ずかしすぎる。絶対に声は出したくない！）

理花には上司としての、年上としての矜持があつた。声を漏らさないように唇をギュツと閉ざす。

コリツ、カリツ、さす…

侑は指で摘むようにしたり、爪の先で擦ったり、かと思えば指の腹で優しく撫でたり、触れ方を変えながら執拗に責め立ててくる。

「ンンッ！……ッ、……んっ……あっ！」

堪えきれなかった声が、理花の喉を震わせる。

理花が羞恥と快感に顔を歪めるほど、侑の瞳に宿る暗い熱は強ま
つていく。

「……先輩、可愛すぎます。会社でのあの冷たい顔からは想像も
できない顔してますよ。」

侑の声は、先ほどまでの冷徹な脅しとは一変し、とろけるような
甘さを帯びていた。

「その顔見てるとキスしたくなつてきちゃった……先輩の唇、もらい

ますね。」

侑は縛り上げられた理花の手首のすぐ横に手をつき、覆いかぶさるようにして顔を近づける。

侑の、形のいい薄い唇が近づいてくる。理花は必死に顔を背けたが、侑の唇は迷うことなく理花の唇に重なった。

「ん……っ！」

執着が伝わってくるような、重いキス。

「ふっ、んんっ！……はっ、やめ、て……。侑くん、お願いだから。」

「

理花が再び顔を背けようとした瞬間、侑の力強い指先が理花の顎をぐいと掴んだ。逃げ場を塞ぎ、無理矢理自分の方を向かせる。

「先輩。命令できる立場じゃないこと、まだわからないんですか？
誰に、何を握られてるか、忘れないでください。」

抗えない力で固定されたまま、侑の唇が理花の唇を深く塞いだ。
最初は拒もうと口を閉ざしていた理花だったが、顎を掴む指に力が込められ、わずかに隙間ができた瞬間、侑の舌が侵入してくる。

「んむ……っ、はあ……っ」

何度も、何度も、角度を変えて深く交わされる口づけ。理花の口内は侑の熱で支配されていく。

「先輩、もっと口開けてください。」

言われるがままに口を開くと、さらに深く侑の舌が侵入してくる。執着を刻むように理花の舌に自分の舌を絡め、ちゅうう、とわざと音を立てて吸った。

侑の舌が歯列をなぞると、ぴり…と甘い痺れが走る。

「……嫌がつてるのに、こんなに熱い。先輩の口の中、すごく甘いですよ。」

侑は、理花の瞳を至近距離で見つめ、微笑んだ。会社では見たことがない、どこかあどけないその表情に、思わず理花の心臓が跳ねた。

「……次は、ここですね。」

侑の視線はすぐに、乱れたシャツの下に伸びるタイトスカートへと移る。

侑はベッドに膝をついたまま、理花のウエストに手をかけ、理花のスカートのジッパーを下ろした。布の擦れる乾いた音が、静かな部屋の中でやけに目立って聞こえた。

「まつ、待って、侑くん……そこは……っ。」

「上だけ触って終わるわけじゃないでしょう？ 今日先輩の身体、全部見せてもらいますから。」

侑は理花の腰を浮かせ、スカートを足元へと引き抜いた。それから、指先をストッキングの履き口にかけ、ゆつくりと、理花の肌を愛でるようにして、つま先まで下ろし、剥ぎ取った。

露わになった、白く、しなやかな理花の脚。オフィスでは常に凛として歩いていたその脚が、今は無防備にベッドに投げ出されている。

「……すごく、綺麗な脚。やつと好きに触れる。」

侑はそう呟くと、理花の足首に指を当てた。そのまま太ももの付け根までするすると指先を滑らせる。

「っ……!!」

理花は反射的に腰を震わせ、声を上げそうになったが、咄嗟に唇を噛み締めた。

「……先輩って本当に頑固ですよ。気持ちいいなら気持ちいいって、素直に言えればいいのに。」

「…誰がつ…」

理花が侑を睨みつけると、侑は意地悪く笑って、理花の膝に手を伸ばした。暗闇の中に浮かぶその笑顔は悔しいくらいに綺麗で、心臓の鼓動が速くなってしまう。

すり、すり……。

指先が理花の膝の裏を、羽毛で撫でるような頼りないタッチでなぞり上げる。

「ん…っ、んっ……」

ゾワゾワとした感覚に襲われて理花の身体は小さく跳ねた。

強く触れられるよりも、こんな風に弱く、焦らすように触れられる方が、神経がじわじわと侵食されていくみたいで耐え辛い。

「先輩、肌スベスベですね。ずっと触っていたくなります。」

侑の指先はさらに上へ。内ももの柔らかい部分を、すうーつと指で何度もなぞり、時々、くすぐるように指をさわ、さわ…と動かす。

理花は頭上のネクタイに食い込む手首を振らせ、ギョツと目を閉じた。声を漏らせば、上司としての最後の一線が崩れてしまう。

「…っ、……んっつ。」

「先輩、喉が震えてますよ。必死に声を抑えてるの、バレバレです。いつまで我慢できますか？」

侑の指がさらに上、脚の付け根の辺りに触れた。侑はしばらく、下着のラインをなぞっていたが、やがて理花の下着に、指を這わせるようにして触れた。

「……先輩、もう下着がびしょびしょじゃないですか。」

侑が下着越しに理花の秘められた場所を撫でながら楽しげに言った。

「ちがつ！ちがうの、これは……！」

「必死で否定するのも可愛いですね。それなら、もつとびしょびしょになるように下着の上からスリスリつてしてあげますよ。ほら、スリスリ、スリスリ。」

「いやあ！それだめえ！」

スリスリなんて可愛い刺激ではない。侑は服の摩擦を利用しながら、一番敏感な場所をピンポイントで擦ってくる。理花は耐えきれずに声を上げて、腰がビクツと動いてしまう。

「ふふつ、後輩に触られてこんなに濡れちゃって…先輩もしっかり楽しんでるですね、僕、嬉しいですよ。」

「…ちがうの。それは身体が勝手に…」

「何が違うんですか？ ほらスリスリしてしたら、腰がピクピクつて動いてるじゃないですか。」

「やだ！ それ、しないでっ！」

「ああ、なるほど。服の上からじゃ足りないですよね？ 分かりますよ、ずっと一緒に仕事してきたんですから。」

侑は白々しくそう言って理花の下着に手をかける。

「待って、脱がさないで！」

侑は理花の言葉を見殺して下着を足首まで引きずり下ろす。

完全に無防備にされた理花は、せめて太ももを閉じようとした。しかし、侑は強引に膝を割り、理花の秘部を露わにする。

「ふふっ、すごい…。」

侑はすぐには触れずに、蜜に濡れた快楽の蕾をじっと見つめた。

「はあ、エッロ……先輩のここ、ぬらぬら光ってしつかり勃起しますね。」

侑はピンッと理花の小さな蕾を指で弾いた。

「ひあ…！」

直接そこに触られて、理花は思わず声を上げる。

「すごっ…弾いただけなのにまた溢れてきた…直接接触したらどうなっちゃうんですか？先輩、想像してみてくださいよ。」

「いやっ、そんなの考えたくもない！」

「普段、お客様の気持ちを考える想像力が大事、なんて言ってるくせにそういうこと言うんですか？ほら、この小さいクリを僕の指

でシコシコ、シコシコつてしてあげたらどうなるんですか？ 後輩に触られて恥ずかしいのに、可愛い声で啼いちゃうんじゃないですか？」

「……っ、想像させないで…」

下着の上から触られただけでも耐えられなかったのだ。直接その弱点を弄られたら、侑の言うとおり、自分のものとは思えないようなはしたない声を上げてしまうだろう。

後輩のネクタイで縛られ、弱みを握られ、秘部を擦られて無様に喘ぐ自分の姿。

そんな自分を想像すると、消えてしまいたいくらい恥ずかしいのに、理花の気持ちに反して理花の花園はさらにトロトロと潤い始め

ていた。

「ははっ、先輩のここ、もつと湿ってきてませんか？ じゃあ予告したとおり、シコシコってしてあげますね…」

侑は理花の雌の尖りを細長い指で挟むと、ゆっくりと擦り始めた。

シコ、シコッ、シコシコッ。

「…ふあ、…やつ、あああッ！」

理花は叫んで、腰を引こうとした。快楽が強すぎて頭が真っ白になりそうになる。

「先輩、逃げないでください。例の件、バラしますよ？」

理花が逃げようとするのを許さず、侑は冷たい声でそう言う。

「ほら、もつと僕が触りやすいように脚を開いてください。」

「ううつ…。」

理花は仕方なく脚を開いた。ぐつしよりと濡れた花卉が侑の前に晒される。

「そう、いい子ですね。ご褒美にもつと良くしてあげますからね

。」「

「…ああっ！」

クチュ……。

侑はわざと指に力を入れず、濡れそぼった理花の秘部の入り口を、撫で回すようにして弄り続けた。

時折、コリ、と一点を掠めるだけの、もどかしくも鋭い刺激。

「んう……っ！ んんんっ………！」

理花の喉が、せり上がってくる喘ぎを抑え込もうとして小刻みに震える。

しかし、侑の愛撫は止まらない。

ズチュ……、ピチャ、ピチャ……。

水音を立てながら、理花が最も弱い場所の周囲を、螺旋を描くようにネチネチと攻め立てる。

「……ふふつ、先輩のここ、すごいことになってますよ。…ぐちよぐちよ。こんな濡らして、声出すの我慢してるなんて……エロすぎます。」

侑は上から下に擦り上げたり、反対に指を動かしたり、触れ方を変えながら理花が感じる触り方を探る。

「あう、ううつ、あんん……！ あああっ……！」

「はあ、声もエロいですね。先輩、そろそろ指、入れますね。」

ぬぷり、と音を立てて脬の指が理花のナカに侵入した。

「……んっ、痛い……っ！」

「……キツイな、処女みたいに固い。先輩、普段はここはいじらないんですか？」

「……ん、んんっ……」

理花は答えない。

侑がキツイと感じるのは当然のことだ。侑は28歳の女性である理花が男性経験が全くないとは考えてないようだが、実際、理花は処女だった。

学生時代は勉学に打ち込み、就職してからは仕事一筋で生きてきた。言い寄ってくる男性がいなかったわけではないが、勉強や仕事の忙しさを理由に全て断ってきた。

「先輩、どこが気持ちいいんですか？ ……ここ？ それとも、こっち？」

侑は探るように指を動かす。自分のナカで侑の指が蠢く感覚はあ

まり心地のいいものではなかった。

「…っ、……ッ…」

不慣れな感覚に耐えるように、理花は身体を強張らせる。しかし、侑の指がある一点を深く押した瞬間、理花の背中が弓なりに弾けた。

「ひ……っ！ あああっ！」

理花は、自分でも驚くような高い声を上げてしまった。侑が弱点を押した瞬間、強烈な快感が背骨を走ったのだ。

「……へえ。ここなんだ。」

侑は勝ち誇ったように目を細めると、逃がさないと言わんばかりにその場所を執拗に攻め立てた。

クチュ、クチュクチュッ

「やめ、て、ゆう、くん、そこ、は……っ！ おかしく、なっちゃ
う……っ！」

「ダメですよ、教えてくれたんだから。もつと可愛く啼いてくださ
いよ、先輩」

「あ、ああっ！ んうつ、そこ、そこダメ、ああっ！」

グチュ、グチュグチュッ。

理花の蜜がさらに溢れ出して、ホテルの部屋に卑猥な水音が響く。

「先輩、ここグリグリつてするとナカがキュって締まるの、よく分かりますよ。そろそろイっちゃうんじゃないですか？」

「ダメっ！グリグリ、い、やあ、それしないでッッ！」

「そんなにいいんですか。じゃあもつとしてあげますね。」

グチュ、ヌチヨ、グリグリッ。

「ひあん、あつ、ダメっ！なにかきちやうの……！」

「ははっ、きちやうの、とか言うんですか？先輩可愛すぎます。ほら、もつといじめてあげますよ。」

「あッ、ひッ、ああんッ……」

「ほら、後輩の指で無様にイッてください。」

「あつ、ああつ、あああああ——！」

理花の腰がビクンビクンと跳ねて足の先までピンつと張り詰める。

誤魔化しが効かない、本物の絶頂だった。

「先輩、イッチやいましたね。先輩がイク姿、最高に情けなくてよかったですよ。」

侑は、蜜で濡れた指を理花の最奥からゆつくりと引き抜いた。

理花はようやく蹂躪から逃れて息を吐くが、安堵する間もなかった。

侑はベッドの上で膝立ちになり、自分のズボンに手をかける。

「はあ、はあ………な、に……？」

怯える理花の目に飛び込んできたのは、侑がズボンを下げて露わにした、硬く昂った男性の証だった。

「見てください。先輩がそんなに淫らな声を出すから、こんなことになってしまいました。……責任、取ってくださいすよね？」

理花は呼吸を整えながら、腹に届きそうなほど反り返った侑の猛りを呆然と見つめた。若さゆえの瑞々しさと、大人の男としての凶暴な質量を同時に持つ大きく太い楔。

糊のきいた白いシャツとシワのない紺のスーツのズボン。侑の爽やかな服装の下に隠されていた、男の欲望を煮詰めたような、暴力的な雄の象徴。経験のない理花にとって、初めて見るそれは自分から内から破壊する凶器に見えた。

「ふふつ、先輩、どうしたんですか、そんなに見つめて……僕のモノがもう欲しくなってきたんですか？」

侑はベッドのサイドテーブルに手を伸ばすと、小さな四角いパウチを取り出した。

「安心してください。僕は先輩を無理やり孕ませて、仕事ができなくなるような無責任な真似はしませんよ。」

侑はそう言い放つと、熱を帯び、硬く脈打つ自分のモノに薄い膜を慣れた手つきで被せた。

装着を終えた侑は、再び理花の太ももの間に膝を割り込ませ、ぐ

いと理花の腰を引き寄せる。

「準備、できましたよ。……さあ、先輩。僕を受け入れる覚悟、できてますよね？」

ラテックス越しに伝わる侑の質量と熱。それが自分の秘部の入り口に押し当てられた瞬間、理花は恐怖と抗いがたい期待に、身体を大きく震わせた。